

自己評価報告書

平成 21年 5月 11日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18320101

研究課題名（和文） 南都における廃仏毀釈後の資料動態に関する調査研究

研究課題名（英文）

A Study of Historical Records Parted from Original Owners at the Modern Times in Nara

研究代表者

吉川 聡（YOSHIKAWA SATOSHI）

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所・文化遺産部・歴史研究室長

研究者番号：60321626

研究分野：日本古代中世史

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード：史料学

1. 研究計画の概要

(1) 本研究が目指す全体的な構想は、南都の古寺社が所蔵してきた歴史資料について、それぞれの資料群の伝来過程を明らかにし、資料群の性格を究明する点にある。本研究課題ではその一階梯として、近代以後に、資料群の保管場所・管理体制等がいかに変化したか、すなわちその動態を跡づける。特にまずは、本来伝来した場所から流出した状態で、現在保管されている資料群の性格を、明らかにせんとするものである。

現在、南都の寺社には未整理の資料が多く存在しているが、それらは、近世以前には別々に伝来した資料群が、混在した状態になっているのが普通である。それらは大きく分けると、その寺社本体に伝来した資料群・寺社の塔頭に伝来した資料群・近代に他の寺社から流入した資料群の三種類に分類できる。本研究ではまずは、さらにはを詳しく調査研究し、それらの資料群の性格を明らかにしたい。そのような研究は、の資料群自体を明らかにするとともに、を抽出する作業ともなるはずである。

研究対象は、広く南都の古寺社を含むが、重点的に対象とするのは東大寺であり、それに次ぐのは興福寺である。

(2) そこでまずは、東大寺図書館所在の中村準一寄贈文書に関する調査研究を行なう。これは、上記の にあたり、近代に東大寺に流入した資料で、興福寺に関係する内容を持つ。その後、東大寺の塔頭に伝来したと思われる資料を調査し、さらには 東大寺本体に伝来した資料に及ぶ。

また、興福寺についても 近代に流入した資料群・塔頭に伝来した資料群を分別して調査する。また、他の寺社についても資料の実態把握に努めるとともに、必要に応じて調査をおこなう。

2. 研究の進捗状況

(1) 三ヶ年にわたる調査によって、東大寺の中村準一寄贈文書（新修東大寺文書聖教第15函・第35函・第43函・第44函・第56函・第75函・第93函・第98函・第99函）については、一通りラベル貼り・文書データのパソコン打ち込みが終了したところである。それらの総点数は四千以上に及ぶ。それらは、中村家にかかわる江戸時代中期～明治時代の資料群である。江戸時代には中村家は、興福寺の唐院・新坊の承仕等を世襲しており、その関係資料が多くを占める。唐院・新坊の承仕は近世興福寺の実務を取り仕切る立場にあり、その実態解明に資する資料と評価できる。また、江戸時代後期～明治初年にわたる詳細な日記が現存している。特に、明治維新期の日記が現存している点が貴重である。激しい廃仏毀釈の波を被った興福寺の実態を解明する上で重要な資料であるので、現在、その一部の翻刻を試みている。ただし、文字はなかなか難解な点もあり、正確な釈文を作成するのに難渋しているところである。

(2) またそれ以外の資料群については、新修東大寺文書聖教第2函1括1号の「東大寺大勸進文書集」に関して、全文翻刻・校訂と詳細な調査検

討を実施し、その成果を雑誌『南都仏教』に掲載した。鎌倉時代の東大寺再建事業について、重源没後の時期における基礎史料と評価できるものであり、極めて重要な内容を有している。それゆえ、今回の研究は東大寺史研究に大きく寄与するものである。その伝来過程についても、建仁寺に伝来した文書を鎌倉時代中期に東大寺で書写したものであることなどが明らかとなった。

(3) 興福寺や他の寺社については、調査の機会に、資料の概要把握に努めているところである。その他、明治時代の研究者である関野貞が、奈良で文化財調査をしていた時期の日記を、単行本『関野貞日記』の一部として翻刻・公刊した。

3. 現在までの達成度

おおむね順調に進展している

当初計画では、2007年度に、中村準一寄贈文書の調査を一通り終了させることを目指していた。その達成が2008年度になったので、その点ではやや遅れている。その原因は、内容の難解さ・量の多さにより調査にやや時間を要したが、しかしながら、調査場所の確保の問題により、調査期間はやや短めにしか確保できなかったことに依る。しかし一方で、中村準一寄贈文書中に発見した日記の翻刻や、東大寺大勸進文書集の調査検討など、より詳細な研究を別途立ち上げ、理解を深める努力をしているところである。特に東大寺大勸進文書集については、2008年度にその成果の公表にまで至った。そのような現状を鑑み、おおむね順調に進展していると評価した。

4. 今後の研究の推進方策

(1) 研究の延長申請が認められ、2013年度まで延長できることとなった。そこで、今後はまずは、中村準一寄贈文書の目録の整理を進め、公表にまでこぎ着けたい。平行して、明治維新期の日記など、重要資料の更なる検討も欠かせない。

(2) 中村準一寄贈文書の調査の後は、当初計画では、新修東大寺文書聖教のうち、塔頭に伝来した資料群と、東大寺本体に伝来した資料群の中から、前者のみをピックアップして調査する計画だった。しかし、ピックアップするにも手間がかかり、そして比較的長期にわたる調査期間を与えられることになったので、まずは両者を区別することなく調査をおこない、一通りの調査終了後に、それぞれの資料群を詳細に検討する、という手順で調査を進めることとしたい。

(3) 新修東大寺文書聖教の調査にメドがついた折には、興福寺をはじめとして、他の寺社の資料も調査対象とする。ただし興福寺の場合は、流出してまた寺に戻っている資料なども多く、複雑な過程を経ているようであり、その動態の

把握は容易ではない。ただし、中村準一寄贈文書中に発見した、明治維新期の日記などは、興福寺資料の動態にも大いに関係するはずであり、そのような資料も援用しながら検討を加えたい。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

吉川聡・遠藤基郎・小原嘉記、「東大寺大勸進文書集」の研究」、『南都仏教』、査読有、第91号、2008年、123-220ページ

吉川聡、「信円の花押 興福寺所蔵「有法差別本作法義」をめぐって」、『奈良文化財研究所紀要』、査読無、2006号、2006年、46-47ページ

〔学会発表〕(計1件)

吉川聡、「東大寺大勸進文書集」、奈良文化財研究所第19回総合研究会、2009年1月28日、奈良文化財研究所

〔図書〕(計2件)

吉川聡、奈良文化財研究所編・発行、『興福寺典籍文書目録第四巻』、2009年、330ページ

藤井恵介・早乙女雅博・角田真弓・大西純子・吉川聡・黒岩康博・清水重敦、中央公論美術出版、『関野貞日記』、2009年、844ページ